

指導資料

社会 第137号

鹿児島県総合教育センター
令和4年4月発行

対象 小学校 中学校
校種 義務教育学校 特別支援学校



自律的に学ぶ児童生徒を育てる社会科学習 —社会科における「個別最適な学び」について—

小中学校学習指導要領の全面実施から1～2年が経ち、各学校では「主体的・対話的で深い学び」を実現し、資質・能力の三つの柱をバランスよく育む授業改善が行われている。そのような中、令和3年1月に「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」が出され、この二つの学びを一体的に充実させることにより学習指導要領の趣旨や理念が実現すると言われている。本稿では、その中の「個別最適な学び」に着目して自律的な学びについて考える。

1 児童生徒が学ぶ姿をどう捉えるか

以前、講義で児童生徒の学びについて受講した際、ある講師が、図1のようなイラストを示して講話された。

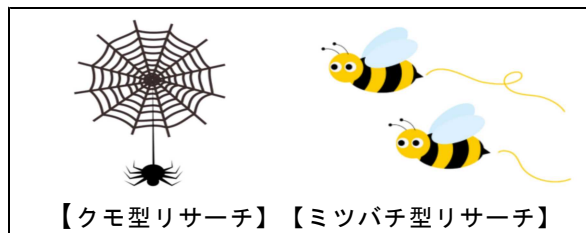


図1 学びのイメージ図

その講師は、学びのリサーチ(児童生徒が学ぶ姿)を、昆虫(ミツバチとクモ)の獲物を捕らえる姿に例えて話された。クモは、獲物を捕らえるためにお尻から糸を出し、綿密に巣を張って獲物が巣にかかるのを待つ。ミツバチは、蜜や花粉がある場所を自分で見つけて獲物を捕らえる。どちらも生きるための知恵である。この姿を児童生徒の学びに置き換えると分かりやすい。まず、クモ型リサーチは、じっくりと教師や友達の話聞いて自分の考えを構築する姿。そして、ミツバチ型リサーチは、自分で課題解決のために一歩を踏み出す(行動する)姿。その際、講師は、児童生徒の主体性を考えるときに、ミツバチ

型リサーチの考え方がこれからは重要であると話された。しかし、クモ型リサーチのようにじっくりと物事を考え(熟考し)、自分の考えを粘り強く構築することも大切であると考える。そして、自律的に学びに向かうという点ではどちらも共通していると言える。

2 自律的に学ぶとは

自律的に学ぶ児童生徒の姿とは、「自分で見付けた課題に対してよりよい選択肢を自分で選び、自分の学びを自分でコントロール(自己調整)しながら学習できる姿」と捉える。

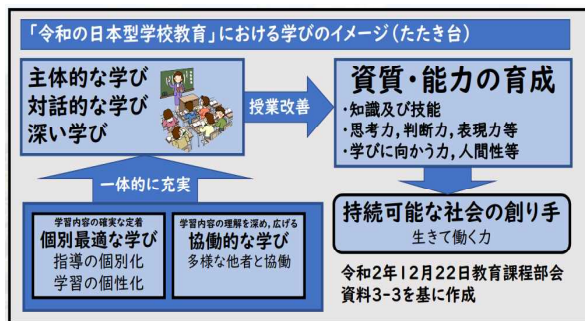


図2 「令和の日本型学校教育」(中教審答申)概要

中央教育審議会の答申(図2)では、「個別最適な学び」について「指導の個別化」と「学習の個性化」で整理している。「学習の個性化」については、自分で課題を設定し、

自覚的に解決していく学びを目指している。また、「指導の個別化」については、一定の目標を全ての児童生徒が達成することを目指しており、私は二つの側面があると考え。第一には「授業前に教師が、目標や学習内容を明確にした上で、追究の視点や学習方法を構想する活動」そして、第二には「授業中の児童生徒の学習状況を見取った（評価した）上で、その状況に応じた指導（支援）を行っていく活動」で考えていく。これは、「指導と評価の一体化」であり、個に応じた指導とも言える。この二つの側面を踏まえながら児童生徒が自律的に学ぶ姿として、「個別最適な学び」を基に考えていきたい。

3 授業における個別最適な学びの構想

(1) 実態や単元に応じた授業構想

単元や授業を構想する際、教師は、学習指導要領等で目標や学習内容を明確にした上で、具体的な追究の視点や学習方法を決定する。その際、一律に同じ追究の視点や学習方法を示すのではなく、児童生徒に自分の興味・関心や課題に応じたものを選択させる場を設定することにより、児童生徒は、自分の意思の下で学習に取り組むことが期待できる。

資料1 追究の視点や学習方法を定める主体

		学習方法を定める主体	
		教師	児童生徒
追究の視点を決める主体	教師	A 集団学習など 教師が追究の視点も学習方法も決める	B 方法選択学習など 教師が追究の視点を、児童生徒が学習方法を決める
	児童生徒	C 課題選択学習など 児童生徒が追究の視点を、教師が学習方法を決める	D 個別追究学習など 児童生徒が追究の視点も学習方法も決める

出典:© Benesse Holdings, Inc. 2014 All rights reserved.を基に作成

そのことを資料1を基に考えると、A(集団学習など)は、教師主導型の授業形態と言える。教師が追究の視点や学習方法を児童生徒に与えており、児童生徒にとって受動的な学びに陥りがちである。また、B(方法選択学習など)やC(課題選択学習など)は、児童

生徒が自分の意思の下で、自分の課題に合った追究の視点や学習方法を選択できるので、児童生徒主体の学習が期待できる。さらに、D(個別追究学習)は、児童生徒が追究の視点や学習方法も決定するので、児童生徒の能動的な学習が期待できる。このような考え方を基に、社会科の学習過程に沿って整理して考えたものが資料2である。

資料2 学習過程における位置付け

学習過程	学習過程の例
課題把握 動機付け 方向付け	●学習課題を設定し、課題解決の見通しをもつ B 方法選択学習 教科書、資料、地図、ICT機器など C 課題選択学習 政策、文化、人物、人々の暮らし等(歴史学習) D 個別追究学習
課題追究 情報収集	●予想や仮設の検証に向けて調べる ●社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察する ●社会に見られる課題を把握して解決に向けて構想する
考察・構想	
課題解決	まとめ ●考察・構想した事をまとめる
新たな課題	振り返り ●学習を振り返って考察する

【「答申」(2016)別添資料3-6を基に作成】

課題把握の動機付けや方向付けの場面で、追究の視点や学習方法について、児童生徒自身が選択できる場を設定することによって、児童生徒は課題に対して自分が選択した学びに見通しをもち、自分の意思の基で学習を進めることができる。そのような学習を積み重ねることによって、自律的に学ぶ力が育っていくと考える。また、授業の終末では、自分が学んでいない追究の視点について「協働的な学び」を取り入れ、お互いに学んだことを比較、分類、総合したり、関連付けたりして共有し、概念的な知識(中心概念)へと高めていく。

(2) 授業中の個に応じた指導

授業中に形成的評価を行う際は、児童生徒一人一人の学習状況に応じた指導(支援)を行う必要がある(図3)。そのため教師は、授業を構想する段階で、想定される児童生徒の学びの様相やつまずきを想定し、その状況に応じた指導(支援)を考えておく必要がある。そのことが個に応じた指導であり、指導と評価の一体化と言える。

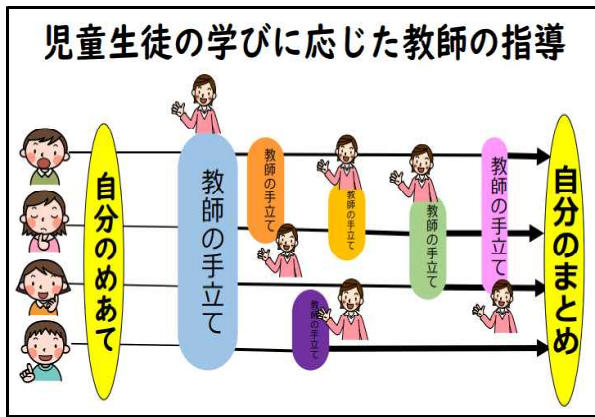


図3 個に応じた指導のイメージ図

その具体的な例が資料3である。特に、学習が停滞したり、学習への見通しが十分でない児童生徒には、その様相に応じた個別の指導をする。

資料3 児童生徒の様相に応じた教師の指導

【単元全体を通して】

児童生徒の様相	想定される教師の指導（支援・声掛け）
進んで学びを進めている	学びの様相を価値付ける。多面的・多角的な考え方に気付かせる。
学びが停滞している	学びが停滞している理由を尋ね、解決策を引き出す。
何をしたいかわからない	どんなことで困っているか尋ね、一緒に考える。

【課題把握（動機付け、方向付け）の段階】

児童生徒の様相	想定される教師の指導（支援・声掛け）
問いを見いだせない	補助資料を用いて社会的事象に気付かせる。
内容の見通しをもてない	一緒に自分は何を調べていきたいか尋ねる。
方法の見通しをもてない	どのように調べたら解決できるか考えを引き出す。

【課題追究（情報収集、考察・構想）の段階】

児童生徒の様相	想定される教師の指導（支援・声掛け）
情報収集できない	資料等と一緒に見て、社会的事象の特色に気付かせる。
考察・構想が十分でない	因果関係や社会的事象の背景を問い掛ける。
考察・構想ができない	調べたことを関連付けて考えられるようにする。

【課題解決（まとめ）の段階】

児童生徒の様相	想定される教師の指導（支援・声掛け）
まとめができない	解決できたことを尋ねたり、引き出したりする。

【新たな課題（振り返り）の段階】

児童生徒の様相	想定される教師の指導（支援・声掛け）
新たな問いが見いだせない	自分の興味・関心から問いを引き出す質問をする。

また、その他考えられる児童生徒一人一人に応じた指導として「発展的な学習」や「補充学習」などが考えられる。さらに、児童生徒が自律的に学びに向かう姿を見取りながら、児童生徒に問い掛け、価値付けたり、意味付けたりすることで、児童生徒の学習意欲を高めることもできる。

また、児童生徒が自律的に学びを自己調整しながら進めるためには、自身の学びを俯瞰的に捉えたり、振り返ったりする場が必要である。そのような活動を通して、児童生徒は、学びの有用性を感じたり、新たな問いをもったりして次の学びへ向かうことができる。

4 実践例

(1) 追究の視点を選択する実際

中学校地理的分野第1学年「世界の諸地域 アフリカ州」の実践を紹介する。

資料4 授業の目標と実際

本時の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
	アフリカ州について、地形、気候、人口、言語、国旗、GDPの項目から、資料を基に他の州と比較して追究し、地域的特色の概要を理解することができる。	アフリカ州の地域的特色の概要を多面的・多角的に考察したり、思考・判断したことを説明したり、それらを基に関連付けたりすることができる。	アフリカ州の特色について、主体的に課題を選択して、自分の課題解決に進んで取り組もうとすることができる。

本時の実際（展開）

過程	主な学習活動
動機付け	1 本時の学習課題を立てる。 アフリカ州にはどのような特色があるだろうか。
課題把握	2 アフリカ州の特色を追究するための見通しをもつ。 アフリカ州のどの分野を調べようかな。 調べたことから、アフリカ州はどのような州と予想できるかな。 【自分で決める 追究の視点】 ①地形 ②気候帯、降水量 ③人口、人口密度 ④言語・国の数 ⑤国旗や歴史 ⑥GDP、GNI など ※ 自分の課題（問い）をもとに、追究したい視点を決め、見通しをもつ。 ※ 3 他の州と比較の視点をもちながら、地域的特色について資料を基に調べる。
情報収集	3 情報収集
課題追究	4 グループで、地域的特色についてまとめる。 ※ それぞれ調べた社会的事象や内容について共有する。
課題解決	5 代表者が発表し、多面的・多角的にアフリカ州の特色を理解する。 一年中同じ作物が生産できる気候や地形、植民地支配を受けた歴史から生まれた経済は、国民を貧困にしているなどの特色がある。 アフリカ州には固有の特色がある。 それぞれの特色は、住む人々の生活とつながっている。 アフリカの貧困問題や農業について調べてみたい。

この授業は、単元の導入段階である。「アフリカ州にはどのような特色があるだろうか。」と学習課題を設定し、教師がアフリカ州に関する追究の視点を六つ示し（資料4）、生徒がそれぞれ自分の意思の下で、追究の視点を選択し、教科書や地図帳、資料集を使って学習した。

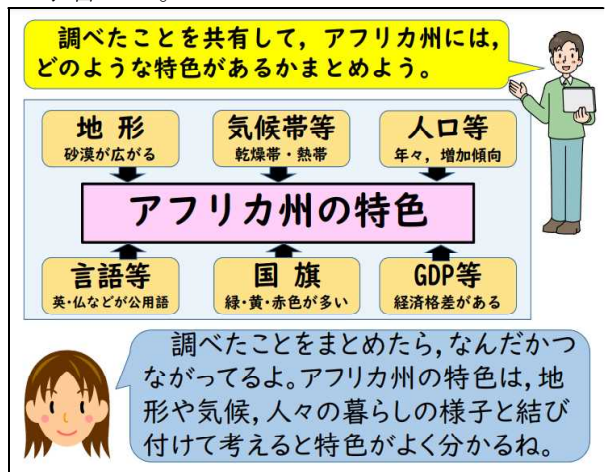


図4 考察・構想する段階

このように、全ての社会的事象を全員が一律に調べるのではなく、それぞれ自分が選択した追究の視点で調べたことを情報交換(共有)することで、生徒は、調べたことに自信をもって表現し合い、調べた内容を考察・構想し、主体的に自分の力で概念的な知識に高めることができた(図4)。

(2) 学習方法(資料)を選択する実際

小学校第6学年「江戸幕府と政治の安定」の実践を紹介する。

資料5 授業の目標と実際

単元の目標		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
資料を基に、江戸時代の始まり、参勤交代や領国などの幕府の政策、身分制などについて調べ、武士による政治が安定したことを理解することができる。	調べた事象を関連付けたり統合したりして、江戸幕府の政策の意図や社会の様子を考え、文章で記述したり説明したりすることができる。	主体的に学習の問題を解決しようとするができる。また、多角的な思考や理解をとおして、我が国の歴史を愛する心情を養うことができる。
本時の実際(展開)		
過程	主な学習活動	
動機付け	1 本時の学習問題を立てる。 なぜ薩摩藩が、木曾三川の工事をすることになったのだろうか。	
課題把握	2 課題を解決するための視点を示し、資料の選択について確認する。 江戸幕府と薩摩藩の立場に立って考えようといふね。 どの資料が一番説明しやすいかな。 【根拠となる資料を選択して調べ、自分の考えを表現する】 ① 木曾三川工事の概要 ② 武家諸法度 ③ 参勤交代の資料(地図) ④ 大名配置図(地図) ⑤ 大名石高ランキング(表) ⑥ 島津氏の歴史 ※ 自分の課題(問い)をもとに、根拠となる資料を選択し、見通しをもつ。 3 江戸幕府の目的や薩摩藩の立場について資料を基に調べる。	
課題追究	4 グループで調べたことを交流する。 ※ それぞれの根拠となる資料を基に、課題解決を図る。	
課題解決	5 全体で共有してまとめる。 江戸幕府が薩摩藩(大名)の力をおさえ、幕府の権力を強化させるために、工事をさせた。幕府の諸政策のため、大名は逆らうことができなかった。	

この授業では児童にとって身近な地域素材「薩摩藩による宝暦治水工事」を取り上げた。江戸幕府の大名統制政策への理解を、幕府側だけでなく、大名側の視点からも考えさせることで、歴史的な事象を一方的な視点ではなく、多角的に考える学習方法を取り入れた。また、教師が複数の資料を準備し、資料を関連付けて考えさせたり、自分の考えを構築する資料を児童に選択させたりする場を設定した(資料5)。実際に児童が資料を調べる場面では、学習支援ソフト「ロイノート・スクール」を活用し、資料箱に六つの課題に関連する資料を教師が準備し、その資料を基に調べていた。グループで考察する場面(資料6)では、画面左側の児童は、大名配置図を基に、地理的視点か

資料6 児童が選択した資料



ら薩摩藩が江戸幕府に抵抗できないことを捉えた。また中央の児童は、武家諸法度に注目して、江戸幕府が薩摩藩の力を抑えていたことを捉えた。さらに、右側の児童は、島津家の立場を表す資料を基に、当時、薩摩藩が権力をもち、江戸幕府から特に注目される存在であったことを捉えた。

5 終わりに

このように、教師が「学習者視点」で授業を構想することにより、児童生徒が課題を自分事として捉え、「主体的・対話的で深い学び」の授業に改善することができる。また、児童生徒が「学習の自己調整力」を身に付けることも重要である。

さらに、「個別最適な学び」を充実させた上で、「協働的な学び」を行えば、集団の学びの質が高まり、児童生徒一人一人の学びも深まっていくと考える。そのことが、児童生徒を「自律的学習者」に育成することにつながっていくと考える。

ー引用・参考文献ー

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会科編』平成30年、東洋館出版社
- 澤井陽介著『見方・考え方「社会編」』平成29年、東洋館出版
- 北俊夫著『なぜ子どもに社会科を学ばせるのか』平成24年、文溪堂出版
- 北俊夫著『社会科学力を作る「知識の構造図」と教科書』平成23年、明治図書出版
- 鹿児島県総合教育センター 令和2・3年度調査研究発表会資料

(教科教育研修課 才川 文秋)